日々是迷宮ナリ(クエスト編)

朱月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日々是迷宮ナリ（クエスト編）

【Ｎコード】
Ｎ７３４７Ｆ

【作者名】
朱月

【あらすじ】
ハイ・ラガート公国にある世界樹の迷宮へと挑む新米ギルド『リアーリス』。だけどいつだって上を目指しているわけじゃない。困った人を助けるのだって立派な役目さ！

こぼれ出ずる清廉（前書き）

これは世界樹の迷宮２の二次創作物として書いている「日々是迷宮ナリ」のクエスト編となっております。
本編での情報が、こっちでの前提となっている場合があるので、こちらだけ読むとわからない部分が多々あると思います。ご注意ください。

こぼれ出ずる清廉

「水？」
　鎧を着た青年の聞き返す声に酒場のオヤジは
「そうだ」と答えた。
「樹海ってーのは、何もバケモンばかりのあぶなっかしい所ってだけじゃねぇ。取れる資材は良質で、食いもんも美味から珍味までよりどりみどりだ。この国の特産品と言ってもいいな。しかしだな、お前らも経験したようにあそこは危険だ。欲しいからといって取って帰って来れるもんじゃねぇ。だからこうして俺が色んなヤツの要望を聞いて、樹海のプロ達に流してんだよ」
「それで今回は水、ですか」
　オヤジは理解してくれた事が嬉しいのか満足そうに頷いた。
「ま、お前らは初めてだしな。今回は入門みたいなものだ。お目当ての物は一階にあるらしいぜ。心当たりはねぇか？」
　心当たりも何も、つい先日まで彼はその水で命を繋いでいたのだ。忘れる訳がなかった。
　聞く限り簡単な仕事だが、君は受けてもいいし、断ってもいい。

　完璧に記された地図を見ながらリアーリス一行は水が湧き出ている地点へと向けて歩いていた。
　まさに命を賭けて作った地図は湧水の場所をも逃さず記されていたので、今回は道に迷う事は無いのだが……。
「これ……満杯に入れたら結構重そうですね」
　そう、問題は依頼された水の量だ。
　満杯まで入れれば恐らく5キロくらいになるだろうと思われる容器を全員分渡されたのだ。
「行きはともかく、帰りに魔物に襲われたら危険だな。もし危ない

と思ったのなら迷わず捨てるように」
フォンの言葉に全員が頷く。命と引き換えな水撒きとは、例え植物好きでも遠慮したい所だ。

そして何事も無く水場へとたどり着いた。
歩き慣れているのだろうか。一行は疲れた様子を見せず、各々容器に水を入れ始めた。
「以前飲んだ時は状況が状況だったから、よくわからなかったけど改めて飲むと違いがわかりますね」
「仮にも樹海だからな。ろ過にろ過を重ねているんだろう」
「最下層だからいっちばん綺麗なんだネ」
リリックは今すぐにでも水浴びしたそうに水面を叩いていた。
「さて、用も済んだし帰るとするか」
持ってきた容器はどれも一杯だ。
これだけの量があれば依頼主も満足してくれることだろう。
「お、重っ……」
問題があるとするならその重量。
普段から鍛えられているフォンとサクにリズは難なく持ち上げられたが、力仕事になれていない他の二人は苦しそうな表情をした。
「も、持とうか？女性にはちょっと厳しい重さだと思うし」
見かねてそう声をかけたが首は横に振られた。
「大丈夫です。私はともかくそちらの両手が塞がっていたら襲われたとき大変ですから」
そんなソニンの健気な姿に感心したフォンだったが、
「何、その時はこれで殴ればいい」
同時にそんな女性ばかりではないと知るのだった。
重い荷物によって変わった歩幅を調整しながら一行は来た道を戻り始めた。
「そっか……これで……」

その呟きは、誰の耳にも入らなかった。

結果から言えば、依頼を完璧に果たす事は出来なかった。
その理由は魔物に襲われたら事にあるのだが……。

出口手前、後十数分程度の場所で魔物と遭遇する。
予想はしてあったので、特に慌てる事も無く容器を武器や盾と持ち換え、体制を整えていた。　しかしその瞬間、予想の斜め上を行く出来事が起きた。
前列にいたフォンとサクの横を颯爽と駆け抜け、思い切り踏み切って跳躍し魔物の頭に渾身の一撃を叩き込んだ。
ソニンが、容器で。

「つい……」
フォンが酒場のオヤジから僅かに減らされた報酬を受け取った後、そう呟いた。
あの強烈な一撃は魔物と一緒に容器まで粉砕してしまったのだ。
「あ、あれなんです！昔読んだメディック教本に杖の重量を利用した壊攻撃する技が載ってて、もし出来たらもっと皆さんの役に立てるかなって思って、決して殴ったら楽しそうだなとか思ったわけじゃないんです！」
早口で言い訳をするが、軽く自爆している。
「やるなら普通に杖でって……そういえばよくあの重さで振り上げられたな」
「面白そうだったから私がちょっと応援してあげたヨ」
がっくりとフォンは肩を落とす。
こんなノリばかりのメンバーでこれから大丈夫なのだろうかと。

「心中察する。お互い苦労するな」
リズだけが彼の苦労を理解してくれていた。
そして報酬を貰うときオヤジに言われた
「台車でも持っていけばよかったんじゃねぇか？」という言葉は心の中にしまっておく事にした。

こぼれ出ずる清廉（後書き）

というわけでクエスト編。
１個１個短いものだから、文章にしてみたって短くなりました。
本編のほうと一緒に掲載すると、ごちゃごちゃになりそうだったので分けての掲載となりました。

大公宮への勤務１

行方不明の衛士を救出したリアーリス一行は棘魚亭にて休息をとっていた。無事依頼を果たしたし、サクの容体も良くなったしで心配事が無くなった事もあり、暖かい飲み物が眠気を三割増で運んでくる。

そろそろ宿に戻って休もうかと思った時、それまで姿が見えなかった店主が戻ってきた。

「お、間に合ったようだな」

店主は戻ってくるなり君達に向かって声をかけ、近づいてくる。

どうやら何か用があるみたいだが、君達は今疲れきっている。面倒事に関わりたくないというのなら聞こえなかったフリをして宿屋に戻るのも自由だ。

「いや、待て待て待て待て。何も今から何かさせるわけじゃねぇって。とにかくコイツを見てくれ」

そういって店主が見せてきたのは一枚の依頼書。どうやら大公宮からの依頼で、その内容はソードマンの募集とだけ記されていた。

ソードマンという単語に視線がリンへと集まる。視線の集合先にいたリンは、事態がよくわかっていないようでハテナと首を傾げていた。

「でもこれ、募集とだけしか書いていないぞ。大丈夫なのか？」

「大公宮からの依頼に汚いもクソもねぇよ。危険な事させるってわけじゃねぇだろうし、やってみる気はねぇか？ほら、報酬も他と比べて割といいしよ」

確かに提示されている報酬は他の物と比べて良い。受けておいて損は無いだろう。

「日時は……明日！？これはまた急ですね……」

「数日前から来てた依頼だしな。……流石に急すぎるか？それにあのブシドーの姉ちゃんがまだ治ってねぇなら本業にも支障でちまう

か」
「サクさんは明日はもう動けると思いますからそれは大丈夫ですけど……」
問題は……と言うような視線がリンに集まる。そして未だによくわかっていないリンは更に首を傾げるだけだった。
「はぁ……。いい、リン。貴方に仕事があるんだけど、やる？」
リズがなだめるような声で尋ねる。色々と省きすぎている感はするものの、詳しく説明した方がリンにとってはわからなくなってしまいそうなので、ベストといえばベストの尋ね方だった。
「やるよ？」
事も無げにあっさりと頷く。
「おぉ、そうか！んじゃあ朝一でここに来てくれ。他に受けたヤツとまとめて大公宮に送ってやるからよ！」
「いや、絶対わかってないから！わかってないから！」

結局、何度説明してもやるという姿勢は変わらず、めでたくリンの初仕事が決定した。

「ほぁーー……」
大公宮はとっても広い所。それは昨日来た時に知っていたけど、いざ一人で来るとより一層大きく感じる。
実際には一人じゃなくて、昨日の何倍もの人がいる。私と一緒にオジさんに連れてこられた人もいれば、別の所から来た人もいるみたい。
でも皆が皆共通してソードマン。私と同じ。私、ちょっと緊張しています。

「勇敢なる冒険者の諸君！今日はよく集まってくれた！」
びっくり。急に鎧を着た人が大きな声を出した。
仕事の内容を言うのかな？だったら良く聞いていないと……。
「君達冒険者には迷宮においての探索、魔物の討伐など日頃世話になっているが、今日もまた君達の力を借りたいと思う！公国も何人もの衛士を君達と同じように樹海に向かわせているが、人手不足が深刻で新兵の訓練にまで手が回らないのが現状だ。そこで今日は君達に新兵の訓練をしてもらいたい！」
……え？つまり、先生をして欲しいって事……？
「えーーーーっ！！」
そして私は、一瞬にしてその場の注目を集めてしまったのだった。

「うー……」
大変な事になった。今私の目の前には五人の衛士さんがいる。
横一列に真っ直ぐ並びながら私が何か言うのを今か今かと待っている。
剣を教えるなんて言っても、私は誰かに教えてもらって覚えたわけではないので教え方なんて全然わからない。
「あのー……」
待ちかねたのか衛士さんの一人が声をかけてきた。
「は、はいぃ！」
びっくりして妙な声をあげてしまった。恥ずかしい……。
「リアーリスの方だとお聞きしたんですが、本当ですか？」
私の新しい場所となったギルドの名前が出てきて、僅かに心が落ち着く。
「う、うん。そうだよ」
うん、と答えられる事がちょっと嬉しい。
「おお！あの鹿殺しのか！」

衛士さん達の中からそんな歓声があがる。
「鹿殺し……？」
ああ、お姉ちゃんがそんな事があったって話してたっけ。
私が知らない頃の話がある事に、ちょっと寂しさを感じた。
「でも確か、ソードマンっていなかった気がするんだが……」
「噂じゃブシドーだったはず……」
サクさんの事かな。病気でまだ一緒に樹海に行った事が無いから、実際に見た事は無いけどすごく強いらしい。
「何だ。その時いなかったのかよ。どのくらい強いのかって期待してたのにな」
急に言葉遣いが崩れる。その違いにちょっとムッときた。
私がさっきまでずっとオロオロしてたせいもあって、どうやら私の事を大したことないヤツなんて思っているのかもしれない。
綺麗な横一列も、今では崩れて衛士同士で雑談なんかも始まってしまった。
このままじゃリアーリスの名前に、信頼に泥を塗ってしまう事になっちゃう。
何とかしなきゃ、何とかしゃなきゃと思ってもいい考えは浮かばない。
「こらぁ！そこ、うるさいぞ！」
どこからか怒声が飛んでくる。パニックになっていた私は、その声に驚かされながらも逆に少し落ち着く事が出来た。
「は、はい！すいませんでした！」
声の主を確認した途端、衛士さん達は元の横一列に戻り姿勢もただした。
「あ……この前の……」
声の主はこの前樹海で助けた衛士さんだった。
「よう、驚かせてすまないな。困ってるようだったんでお節介しにきたんだが、お邪魔だったか？」
そんなことないと、全身を使って表現する。

「あ、あのお知り合いなんですか？」
衛士さんの一人が恐る恐るといった様子でたずねてくる。
「知り合いも何も、俺の命の恩人だ」
その答えにすごく驚いて、何だか焦り始めた。
やべぇよ、無礼な事いっちまったよ……みたいな事をブツブツと言っているけど、それじゃまるで……。
「ん、ああ。実はキマイラの情報を持ちかえった事でちょっとばかし偉くなっちまってな……。俺の功績なんてほとんど無いんだけどな……」
言いながら苦笑いを浮かべている。それに少し自虐的な色が混ざっているのはきっと……。
「まぁ何だ。助けてもらった人にこんなこと言うのもあれだが、あんたはっきり言って教えるのに向いてないな」
物凄くはっきり言われて落ち込む。確かにその通りなんだけど……。
「だったら、こうすりゃいいんじゃねぇのか？」
そう言って彼は、手にしていた槍を私のほうに向けてきた。
「なるほど……、確かに手っ取り早いかも」
彼の意図を理解して私も支給されていた木剣を構えた。
「……私は木剣なのに、そっちは槍なの？」
「ハンデだハンデ」
随分なハンデだなぁと思ったけど、仕方ないのでそのまま彼に向って剣を振るった。

結果から言えば、きっと大成功に終わったんだと思う。
槍と剣、それもこっちは練習用の木剣。かなりのハンデだけど、一分ほど打ち合って私はその勝負に勝った。
しかし大変だったのはそれからで、私が模擬戦闘で教えようと

してる事が回りに知れ渡った事、血気盛んな冒険者達であふれていた事で、私に勝負を挑む人が現れてしまった。
その人たちを負かして、負かされて、ムキになってリベンジして。そうこうしているうちにものすごく熱狂し始めて……。
気づけば外が暗くなるまでずっと剣を振りまわしていた。これじゃあもう教える……というより自分の修行になっちゃってるんじゃないかなぁ。
でも依頼主である大公宮の反応は上々だった。樹海で生きている人の強さがどのようなものかを教え、それでも一瞬の油断が命取りになる樹海の危険を教え……、一番大切な『油断しない事』を思い知らす事ができた……とか。難しい事はよくわからないけど、上手くいったんだからヨシとしよう。

「かぁーっかっかっか！随分と活躍したそうじゃねぇか！報酬にイロつけてもらって、紹介主である俺の評判もあがって一石二鳥、いや三鳥ったぁーこの事だなぁ！」
店主はいたくご機嫌だ。それもそのはずで、今回のリンの仕事ぶりは大公宮中に噂が飛び交うほどだったとか。先日の衛士救出に今回の事が重なって、これから大公宮からの依頼が、それもギルド名指しで来ることが増えてくる。
依頼の報酬は樹海の探索を進める上で貴重な収入となるので、今回の事はかなりプラスに働いたことだろう。
「でも失敗しなくてほんっとよかったよぉ！」
今日の主役はリン。店主が気前よく奢りだと豪勢に振舞ってくれた料理を頬張っている。
「それに比べて、お前らはよぉ」
しかしその隣ではリンを除くリアーリスのメンバーが……ずいぶんとくたびれた様子で腰を掛けてた。

「……」
一言も喋らずに、並べられた料理を少しずつつまんでいく。
「残さず食べような……。後一個になっても誰かに油断とかするなよ……」
フォンが暗い声で、意味のわからない言葉を口にした。
君は彼の言葉をただの戯言と思い聞き流すのもよい。しかし、その奥に何か隠された意味があるのではと思い頭を悩ませるのも君の自由だ。

大公宮への勤務２

「むぅ……」

リズが帳簿を見ながら唸っている。

現在リズがいる場所は宿屋や酒場ではなく、公国に功績を認められた者に与えられるギルド専用の住居の中だ。

もちろん借りるという形になるので、決して安くは無い家賃は取られる。五人のままでずっと樹海をいくというのなら宿屋を利用し続けたほうが安い。だがリアーリスの方針としてはメンバーを増やしていきたいと思っているので、公国の好意に甘えたわけだが……。

「金が足りないな……」

家賃や道具代、武具の修理費等を考えると次の探索における準備が十分に整えられないかもしれない。

一層を越え、二層へと到達してからの初探索だ。中途半端な準備は命取りになる可能性がある。

「それもこれも全ては……」

視線を全員分の武具を置いている場所にある、一対の剣と盾に向ける。

キマイラとの戦いで両方を失い、新調する事に関しては文句はないのだが。

「何も……次の探索に支障が出るほど高価な物を買う必要はないだろう……」

はぁと溜息をつきながら帳簿をしまい、何枚もの紙束に目を向ける。

棘魚亭でもらってきたクエストの写しだ。

クエストは内容にもよるがまとまった金額の報酬をもらえるので積極的に受けて行きたいのだが、条件が合わないといけないのが多く、そう上手くはいかない。

だが一枚、リズの目に留まる。そしてにやりと頬を緩ませた。
「そうだな。自身の負債は自ら返してもらうとするか」
その紙を手に取り、実際に仕事をする本人に告げないまま棘魚亭の主人に受ける旨を伝えにいくのだった。

「魔物の集団を確認しました！！」
見張りをしていた公国の衛士の報告で、辺りに緊張が走った。
戦闘態勢をとるパラディン達。しかしその中で未だに状況を掴みきれていないのが一人いた。
「俺は何でこんな所にいるんだ……？」
新しい起床場所にも慣れ、久方ぶりの快適な目覚めを満喫していた所にリズが現れて、棘魚亭に連れてかれたと思ったら、今度は店主に連れられ妙な集団と合流し、今に至る。
その集団の中には何度か見かけたことがある顔、無い顔が混ざっているが見た限り全員がパラディンのようだ。
衛士の姿もちらほら見えるし、この間リンが受けていたような大公宮による特定の職業の募集だろうか。
「ああ、そういうこと……か？」
お金が無いと唸っていたリズに、報酬の良い大公宮の依頼。
「何も連絡が無かったのは仕返しって所か……」
確かに、確かにちょっと値の張る買い物だったかな……とは思ったさ、うん。
でも皆を守るための剣、盾！妥協したくなかったんだ！
（それで薬や他の装備を整えられなかったら話にならないな）
どこかからリズの声が聞こえた気がしたが、きっと幻聴だろう。
「突撃ーー！！」
公国の司令官が号令を出す。
今回の依頼はどうやら魔物の討伐。

精々活躍してリズのご機嫌でも窺ってやろうではないか。
新しい相棒達の初舞台でもある。一番の功績を狙うくらいの意気込みでやってやろう。
構えた相棒達はまだしっくりしないものの、確かな心強さを感じる。
動き出す集団にのまれないように一歩先を走り先陣を切っていく。
相手は樹海では見ない魔物だが、こちらは魔物というより凶暴化した動物と言ったほうがしっくりくる。普段目にしている樹海の魔物に比べたら平和な姿をしている。
目の前の一匹を斬りつけ、横の一匹の攻撃を盾で防ぐ。
何て事は無い。樹海の魔物に比べたら楽なもの、
「はぁ！！」
後から迫ってきていた魔物が二つに斬られる。
まるで気付かなかった自分の油断を戒めながら、斬られた魔物を見てその威力に目をむく。
「大丈夫ですか？」
そして現れたのは長い緑色の髪をした女性の騎士であった。重厚な鎧に、装飾を施されながらも鋭い威力を垣間見させる剣を身につけ、さながら姫を守るナイトを思わせる。
「助かった。ありがとう」
ただ者ではないと直感すると同時に、どこか初対面には思えない感じがする。
どうやらそれは向こうも同じようで「どこかでお会いしたことありませんか」と尋ねてきた。
しかしながらどちらにもそのような記憶は持っていなかった。
「は、申し遅れました。私、イリエスと申します」
恭しい自己紹介に戸惑いながらフォンも自己紹介をする。
お互いに名前を交換したにも関わらず、何も思い出せない所を見るとやはり完全に初対面のようだ。

「不思議な縁ですね。道に迷ってるうちに知らない国に辿りつき通貨が違い実質の無一文……。なんとか仕事を斡旋してもらいここにいるわけですが、ふふ、全てはこの縁のために思えてきました」
そこまで言うかという気持ちと、ずいぶん難儀な事になってるなという気持ちが苦笑になって現れる。
「まぁとにかく」
少し話しこんでいるうちに随分と囲まれてしまっている。
「路銀が無ければ、どうにもなりませんから」
お互いの背中を守りつつ、迫りくる魔物達と対峙する。
まるでそれは結界のよう。死角の無い守りは攻撃全てを受け、流し、そして斬り伏せる。
危機を感じた魔物達がいくら集まってこようとも、その結界が揺らぐ事はなく、魔物達の亡骸が山のように積み重なっていく。
実に全体の半数もの魔物がたった二人によって討伐される事となった。

「流石リアーリスだ。他の者たちとは比べ物にならない戦果だ」
討伐完了の最終確認を終えた司令官がフォンの元へやってきた。
満足のいく戦果だったのか、司令官の顔はとても嬉しそうだ。
「そちらの騎士殿も、飛び入りの参加と聞いていて少々不安だったが、杞憂だったようだな」
イリエスは話を振られた事に一瞬遅れて気づき慌てて返事をする。
流石に疲れたか、と司令官は笑いながらその場を離れていった。
「奇縁とは、まさにこの事なのですね」
イリエスは心底楽しそうに笑う。
その意味を図りかねないフォンはただ首を傾げる。
「まぁいいや。これからどうするんだ？公国で一泊はするんだろ？良かったら俺達のギルドで借りている部屋が空いているが」

「いえ、早朝には発とうと思っているので、宿屋を利用させてもらいます」
無理強いする事もないか、とフォンはわかったとだけ言い街へ戻り始める。
「あ、少しいいでしょうか」
それを引き止め、イリエスはフォンに今日の縁に感謝するように告げる。

「ほら、これでいいんだろ」
リズの前に報酬が入った革袋を置く。
胸の奥を温めそうなくらいの重さをもった革袋を受け取り、満足そうに微笑んだ。
「にしても、何も言わずにクエストに出す事は無いんじゃないのか……」
「ちょっとしたサプライズイベントと受け取って欲しいわね」
「いらねぇよ……」
はぁ……と肩を下ろしながらふと今日のクエストを思い出し、確かにサプライズだったなと頬を緩ませる。
イリエスが最後に告げた事。それは彼女も目指している街でギルドを作ろうと思っている事。そしてそのギルドの名前を『リアーリス』にしようとしていた事。
まさに奇縁とはこの事か。初めて会った気がしなかったのも、その縁のおかげだろう。
「それにしても……カザンなんて街、聞いたことないなぁ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7347f/

日々是迷宮ナリ(クエスト編)

2010年10月10日12時59分発行